

Taler

まっまっマグロ!

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

流行りにあやかりたかっただけです

出遅れましたけど……

目次

E D A R K N E S S	54
B l a c k C h o i r S i n g a H y m n f o r T H	51
B l u e T r a i 	48
I t w a s t a i n e d i n e v i l	45
Q u o d E r a 	42
N o O n e :. :. :. :. :. M e	40
G O O D o r E V I L	38
W h y B o r n P e o p l e	34
B e c k y t o w a l k t h e h e l l	31
b e i n g D i r t y	28
Q u i z f o r E l i t e m a r i n e r s w h o i s	25
C o n d i t i o n s O f H e r o	21
O n e D a y T h a t I s H a p p i n e s s	18
S o m e o n e N o b o d y K n o w s	15
F r i e d F a c e C h a s e T h e S h a d o w o f	13
R i p p e r I I	11
r k	7
B L A C K D I C K S a y s J o k e I n T H E D a	3
I n T h e R o o m I n T h e T o w n	1
A d v i c e r , s H e a d H a s N o A c h e	
M o s e s o f F a i l u r e	
C h i c k e n R a c e	
l l	
T a l e r i s g o i n g t o H e a v e n o r H e	

i r o n	T e x a s	S h a d o w	s h a l l o w
	C o w b o y	S w i m	c l e v e r n e s
	d r i v e	I n	
	a	T h e	
	h o r s e	D a r k	
	o f		
65		62	59

# T a l e r i s   g o i n g   t o   H e a v e n   o r   H e l l

照由 御伽は海を漂っていた。

ミャンマーの奥地に全長4mを越える巨大トラの存在を聞きつけ、取材しようと決心したのが2週間前。

交通費をケチるために大連から小型のボートと護衛兼通訳としてマレーシアから出稼ぎに来ていた大柄のマレーシア人を買ったのが一週間前。

行き付けの煙草屋で買ったガラム2カートンが無くなり渋々マレーシア人が持っていたB&Hを吸い始めたのが三日前。

船酔いで海に吐瀉物をぶちまけたのが32時間前。

その吐瀉物に群がった小魚を釣って食べながら、「最後の晚餐にならないことを祈る」と冗談でマレーシア人に話したのが26時間前。

雲行きが怪しくなり危険を感じた御伽が船の速度を上げたのが10時間前。

サイクロンに巻き込まれ船が転覆したのが9時間前。

そして、日が沈んでから3時間がたった。

「交通費をケチったのが不味かったかなあ」

今は中国で雇ったマレーシア人もいない。誰もいない空に向け、一人、愚痴った。

沈む直前に残った食料を全て胃の中に放り込んで正解だった。腹は減ったが、何も食べなかつたよりはましだったに違いない。

膨らまない胃袋、飲み水すらまともでない。

「えつと……、月があつちから上るつてことはあつちが東で、月が西に動いてるつてことは……南に流されているわけか」

誰もいない空に向け、一人呟く。方角さえわかればなんとかなる。船が転覆した地点から考えて今は恐らくベトナム、西沙諸島、南沙諸島に囲まれた海域だろう。近くに島陰も人陰もない。船の音は幽か

に聞こえるが日本へ向かう貨物船であろう。こちらには気づくはずもなく、遠く、遠く走り去っていく。

いや、1隻近付いてきた。タンカーなどとは違う、恐らく、足の速い軍用用に作られたボートだろう。

軍ならば都合がいい。国際問題に発展しないよう不遇な扱いは少なくとも受けないだろう。

しかし、明らかに決められた速度をオーバーしている。所々改造しているように見える。

まともな船ではないのだろうか？

御伽はそう思いながらも手を振り上げ救助を求めた。

「K r u ? ā c h w y s ā w s w y x ? ā n g m ?  
ā c h e ? x d ? l d l n g t h ī n  
ī ,」

船の中でG o o g l e 翻訳を見ながら覚えた拙いタイ語を叫ぶ。

船がこちらに向かつて舵をとる。気づいたのかもしれない。そう思い、一層強く、大きく手を振った。

船が横に荒々しく停まり、ブイが投げられる。

「H e y ! A r e y o u o k a y ? O r a l i v e ? .」

一人の男が手を伸ばす。

御伽はその男の顔を見て目を光らせた。

岡島緑郎がそこにいた。

## Chicken Race

御伽は喧しい雑踏と響く銃声で目を覚ました。

ロアナプラに到着してから一週間は経った。未だに慣れない銃声と窓から侵入してくる危ない葉っぱと安全な葉っぱと火薬の臭いにうんざりしながらシーツを蹴りあげ、自分の服装を確認した。

強盗や強姦の跡がないことを確認し、安堵と強姦の跡がないことを確認しなければならぬこの町の現状に対し溜め息を漏らした。

話は一週間前に遡る。御伽が遭難し、魚雷艇に拾われ、岡島緑郎を見つけたその日である。

拾われた御伽ができることはただ一つだけだった。御伽は浮き輪に捕まり、引き揚げられると、目の前にいた岡島緑郎に対して、一瞬の迷いもなく、躊躇いもなく、もつとも無駄のない、人間の最速とも言える速度で

泣きついた。

「助けてください。嵐に直撃し、船も仲間も皆沈んでしまいました。貴方方の目的の港まで構いませんから連れて行ってください」

この行動の目的はただ一つ、同情を買うことにある。如何にも自分は何も知らない日本人観光客の振りをする。外見、人の良さそうな岡島緑郎ならば同情してくれるだろう。

「ハイハイロック。お前はいつ寄ってくる女を引き離さない度胸を身に付けたんだ？」

目付きの悪いアジアンが食いついてくる。恐らく、近付く人間を警戒せず胸元をさらけ出した無防備さをなじったのだろう。

「もしその女が私ならテメエはとつくに胸に空いた新しい穴から直接酸素を吸うことになってたぞ」

アジアンはやれやれというように肩をすくませた。

「レヴィ。残念ながらここはロアナプラじゃないし、彼女はただの日本人観光客だ。それとも、彼女のベルトに日本刀が仕込まれているように見えるのか？」

「見えるんだよ。サムライソードなのかビームサーベルなのかは知らねえが、何か隠し持つてる気がするんだよ」

岡島緑郎とレヴィと呼ばれたアジアンが言い争うのを眺めながら御伽はこれからについて考えていた。

「嬢ちゃん、ちよつといいか?」

黒人の大男に話しかけられる。

「何でしようか?」

振り返りながら首をかしげる。少しくらい媚を売っても悪い方向には流れないはずだ。

「嬢ちゃんにいくつか質問がある。うちのクルーがどうしても思ったからな、悪いようにするつもりはない。しかしだな、俺らとてヒトラーとルーズベルトは乗せたくねえ。わかるだろ?」

「素性を調べさせろってことですか?」

この男は恐らく一筋縄ではいかない。頭の回転は速そうだ。それに見た目の通りなら力もある。変なごまかしはしない方がいいだろう。

「そうだ。とりあえず、自己紹介してもらおうか。わからないところがあればこつちから聞く」

「嘘をついたら?」

「何てこたあねえよ。お前さんのファミリーネームがアドルフになるだけだ」

逃れることはできそうにない。この場で素性を調べるということは嘘をついてもすぐにバレる。

御伽は鼻から溜め息を漏らした。

「照由御伽(てるよしおとぎ)25才です。7月23日生まれの獅子座で、血液型はAB型です。身長は158で、サイズは上から75、60、80くらいです。ここには観光で来ました。」

貧乳とか言ったら殺す

御伽は言い切ると「文句ありますか」とでも言いたげな顔になった。しかし、黒人は納得していないようである。

「色々話してもらったところ悪いが、俺が聞きたいことが聞けてねえ。」



「……所属は？」

「フリーのジャーナリストです。適当に面白いことがあればその地に向かい、写真を撮って、文を添えて出版社に売り込んでます。普段はフリーターで、主に派遣をしています」

黒人は暫し考えると奥の方へ視線をずらした。

「だ、そうだ。ベニー、ヒットしたか？」

すると、奥から金髪の細身の男が出てきた。

眼鏡をかけており、一般的なオタクのイメージそのままである。

「彼女の存在に関しては確認できたよ。名前、生年月日とかについては嘘をついているとは考えられない。……スリーサイズについてもね。」

そこまで言うとおタクは少しうつむき、眼鏡を光らせながら「ただ……」と付け加え、続けた。

「彼女の言うジャーナリストとしての活動に関しては情報が得られなかった。昔書いた記事とか、もしあるならライターとしての名前が別にあるならそれも教えてもらえるかな？」

このオタクは仕事が早い。そう思いながら御伽はオタクの質問に答えた。

「そうでしたね。私は記事を書くときは来ヶ谷乃愛（くるがのあ）の名前を使っています。一方的に記事を郵送して、情報提供料とかは全て振り込んで貰っているので出版社にも名前は残っていないと思います」

「来ヶ谷!?!」

先程からアジアンと言いつ争っていた岡島緑郎が突然声を荒げた。心なしか声が裏返っている。

「どうした、ロック。生き別れたガールフレンドを見つけたみてえな顔してるぞ」

「違うよダッチ。来ヶ谷って言うのは昔俺がいた会社の汚職記事を書いた記者の名前だよ。文体とか証拠とかは曖昧で世間では誰も信じてなかったけどね」

「結果は？」

「彼女の推測が的を得ていて……いや、的を得すぎていて幹部が大騒動してたよ」

岡島緑郎は入社二年目ながらも上司の尻拭いをさせられていたことを思い出していた。

「確認がとれたよ。彼女は照由御伽、来ヶ谷乃愛で間違いないよ」

オタクの声が奥から響いてきた。疑いは晴れた。

「これで嬢ちゃんの疑いは晴れた。で、これからどうするよ。」

「私としては皆さんの目的の港まで送ってくださるのが一番助かります」

「だそうだ、レヴィ」

「ロアナプラまでなら送ってやつてもいいんじゃないやねえの？どつかのアホみたいに『安全なところまで送れ』って言ってる訳じゃねえし」

「レヴィ、君は何と言うか、甘くなつたね。そう思うだろ？ロツク」

「そうだな。俺を拐ったときと比べれば間違いなく丸くなってるよ」

「予定変更だ。一瞬で天国まで送ってやるよ。今ならサービスで冥土の土産の鉛玉を一人一発ずつサービスでぶちこんでやる！」

静かだったラグーン号内が瞬く間に騒がしくなった。今はこの喧騒も悪くないと思い、御伽は目を閉じて、この騒がしきを受け入れることにした。

たまには騒がしいのも悪くないと言っていたが、無理だ。ラグーン号に拾われてから一週間経ったが未だに慣れない。

御伽は窓を閉め、対して意味をなさない旧式のエアコンの電源を入れ、机の上の資料に目を通すと、この喧しい町から逃れるようにベッドに入り、静かな世界へと旅立っていった。

# Moses of Failure

「つ、俺は神だ

一つ、俺以外に神はいない

一つ、俺の名前を呼ぶときは覚悟しろ

一つ、パーティーは土曜日にすること

一つ、親父さんは大切にしろ

一つ、殺すときはバレないように

一つ、バレるような嘘はつくな

一つ、人のものは盗むならば持ち主も殺せばバレない

一つ、レイプはするな

一つ、浮気はするな

「何のことかわかるか？ ロック」

事務所の壁に貼り付けられた項目を見ながらダッチはロックに尋ねた。

「モーセスの十戒だろ？ えらくロアナプラ風にアレンジされてるけどね」

ダッチは頭を掻きながら再び尋ねた。

「そうじゃねえよロック。 どうしてこんなもんがうちの事務所に貼られてるのかって話だ」

「いいんじゃないかな？ 正宗派以外なら基本的に僕は賛成だよ」

事務所の奥からノートパソコンと資料を持ってきたベニーが横槍を入れる。

「ベニー、俺が言いたいのはそういうことでもねえんだよ。 誰が何のためにこんなものを貼っているのかって言うことだ。 ベニーボーイ、お前さんの見解を聞きたい」

ダッチはそういうとソファアに深々と腰かけた。

「5W1Hに則って答えるなら、タイラーが昨日、ダッチが帰った後に『集団生活を行う上では規則が必要です』と言いながら皆の目につくであろうコルクボードに貼り付けていたよ」

「ロック、タイラーは？」

「昨日の夜僕の部屋に来て、晩酌してたよ。そろそろ起きて来る頃だ  
と思うけど」

ロックがそう言い終わるが早いか、事務所の扉がゆっくりと開い  
た。

「おはようございませす……」

タイラーこと照由御伽が現れた。

「タイラー、この貼り紙はなんだ？うちは慈善団体でも偽善団体でも  
ねえんだが？」

ダッチが御伽の顔に件の貼り紙を押し付けた。

「タイラーは止めてください。私は御伽つて言う可愛らしくてファン  
タジー溢れる素晴らしい名前があるんです」

御伽も負けじとダッチの方へ顔を寄せた。

「諦めなよタイラー、人にあだ名をつけるのはその変人の数少ない趣  
味なんだ。それに今日は十戒にある通り安息日の前日だ、冷えたビー  
ルでも飲みながら頭を冷やしな」

ベニーが冷蔵庫から缶ビールを3つ取りだし二人に一本ずつ渡し  
た。そしてビールを飲みながら続けた

「tinyとtellerとwriterがちゃんと掛かってて彼に  
してはなかなかいいできだと思っよ」

それでもにらみ合いを止めない二人にを見限りロックが間に割っ  
て入った。

「もうこの話題は終わりだ。タイラーはちゃんと貼り紙を剥がしてく  
れ、ここに迷える子羊はいないからね」

ロックは言い終わると冷蔵庫までビールを取りに行った。

「OK、tinywriter。クールにいかうか。物事を進める上  
で大切なのはクールなこととそれが面白いかだ。わかるだろ？」

ダッチはタイラーの顔に押し付けていた貼り紙を離し、破り捨て  
た。

「わかってますよ。私も一切話を通さずに貼り出したのは悪いと思っ  
ていますし……」

御伽が僅に頭を下げる。

その様子を見てベニーとロックは満足そうに口角を上げた。

「ダッチ、今日はもう事務仕事も終わったんだし飲みに行こうよ」  
「そうだな」

ベニーがダッチの背中を押しながら事務所を出ていく。

部屋にはロックとタイラーが残された。窓から沈みかけの太陽橙の光が差し込み、二人の影を長く伸ばしている。

「タイラー、君も行こうか」

「ロックさんもタイラーって呼ぶんですか？」

御伽がロックの顔を覗き込む。下から覗き込む彼女はジャーナリストとして掴み所のない様子とはことなり、儂く弱々しく美しかった。

ショートボブの黒髪が風に揺れる。黒髪が夕日に当たり黒く妖しく美しく輝いている。

ロックは大きく息を飲み込み、喉をならした。

「残念ながらダッチが決めたことだからね。彼のつけたあだ名で呼ぶことに決まってるんだよ」

「わかりました。諦めることにします」

タイラーは頬を膨らませ、そっぽを向いた。

「さ…さあ、タイラーも飲みに行こうか」

「私も飲みたいのでもちろん行きますよ」

「ほら、ベニー達がしたに車を出して待ってるだろうから急ごうか」  
「はいっ」

二人は事務所の扉を閉め、階段を駆け降りていった。

くく翌日くく

「何でテメエはまた同じもんを同じところにはつつけてんだよ」

ダッチが静かにタイラーに問い詰める。大柄のダッチと小柄なタイラーとではまるでダッチがタイラーに覆い被さるかのように見える。

「モーセスさんも一回目は破り捨てたけど二回目には受け入れたのでもしかしたら二回目なら許可してもらえるかと思いましたが……」

オマケ「イエローフラッグにて」（ベニーとロック）

「はあ……」

「どうしたんだいロック？えらく疲れてるみたいだけど」

「あの後二人でタイラーと話してたんだ」

「何か楽しそうなお話ができていたみたいで何よりだよ」

「からかわないでくれ。本当に疲れた」

「何があつたんだい？」

「……いや、何でもないよ。恐らくあれは見間違いだ」

「それならいいんだけど……。何より三人目の常識人の加入を喜ぼう  
じゃないか」

「そうだな」

「乾杯」

# Advicer, s Head Has No Ache

ベニーは自室の布団で目を覚ました。

起きてまず枕元に置いたタバコを一本取り出して火をつける。この地獄のような日常のなかで許される数少ない至福の時である。

タバコを吹かせながらベッドから重たい身体を起こし、パソコンへと向かう。そろそろジェシーからのメールが届いているかもしれない。メールボックスを開いたところで違和感に気付いた。

シャワー室から音がする。

女を連れ込むような趣味はない。強盗ならば呑気にシャワーを浴びるような阿呆はいない。となると仕事仲間だろう。しかし、誰がベニーの家に好き好んでくるだろうか。

まず、ロックではない。ロックはレヴィに連れ去られ、あの後何軒か梯子もしくは彼女の部屋に連れ去られたはずだ。

そして、ダッチでもない。彼は人の部屋に勝手に上がるような真似をするような男ではない。

ふと、灰皿に目をやる。アメリカンスピリット独特のインディアン風の鳥の印がある。

僕の知り合いのなかでアメリカンスピリットを吸うのは二人しか知らない。ダッチとタイラーだ。

吸い殻からメンソール特有の鼻につく臭いはない。

Q. E. D.

シャワーを浴びているのは恐らくタイラーだ。

いくら女性らしい凹凸に乏しい彼女の身体でも、1セントも払わずに拝むのはローワンが許さないだろう。

僕にできることはただ一つ。

彼女が存分に僕のポケットマネーから水道代をかつさらうのを待つだけだ。

答えが出たことに安心し、新しくタバコに火を灯す。

念のため、誰か僕の恋人達に触った形跡がないか確かめる。

椅子に仕込んだ針金は……折れている。

マウスの位置は……変わってない。

エンターキーに仕込んだ糸屑は……落ちていない。

この糸屑は日本のとある漫画に倣って設置したものだ。エンターキーを押せば糸が折れる。

灰皿に彼女の吸い殻があることから彼女はこの椅子に座ったと考えられる。ならば、椅子に仕込んだ針金が折れていてもなんだ問題は無い。

ロックから貰ったマイルドセブンという銘柄のタバコを4本消費したところで水道代泥棒が出てきた。

僕の推測は間違っていないかった。

「あれ？ベニーさん、起きちやいましたか？」

バスタオル一枚をまとい、すつとんきような顔をしている。さもシャワーを浴びていたら突然友人が訪ねてきたかのように。

「残念ながらここは君のうちじゃないよ。」

「知ってますよ。私だってお酒は強い方ですよ。記憶がなくなるまで酔うことはないですし」

彼女はあっけらかんとした表情で答える。悪びれる様子もない。

僕は頭を抑え、ため息をついた。

「そうだったね。君はそういう女性だった。もう文句は言わないから自分の部屋に帰ってくれないか？」

そう伝えると彼女に伝えると、彼女は頬を膨らませながら黒いボックスから1本タバコを取り出した。

「最後に1本吸ってから帰ります」

そうして、彼女こと水道代泥棒は僕の知るなかで最も吸い終わるのに時間がかかるタバコに火を着けた



# In The Room In The Town

照由御伽はタバコを最後に一口大きく吸い、胸を膨らませる。アメリカンスピリット独特の舌が痺れるようなわずかな辛味とペリツクの強い香りが口のなかに広がる。

まず、鼻からゆっくりと吸い込んだ煙を半分ほど吐き出す。香ばしい香りとペリツクの甘味と苦味を含んだ香りが鼻孔を擦る。

そして、残った煙を口からゆっくりと吐き出す。わずかに口のなかにまとわりつく香りが心地よい。

そしてベニーの恋人の近くに置いてある灰皿にタバコを押し付ける。サクサクと耳障りのいい音が灰皿から御伽の耳へと届く。

等と彼女は至福のときの終わりを楽しんでいるだろう。しかし、いつまでも彼女にここに居座ってもらおうわけにはいかない。

「さあ、楽しいシガータイムが終わったなら帰ってくれ。今日は部品を買いに行きたいんだ」

「デートですか？」

掴み所がない。まるで雲か霧だ。……いや、彼女をそう例えるには彼女は固すぎるそして堅い。目にも止まらぬ速さで掴もうとした指をすり抜けていく。

飄々とした態度をとっているが根は恐らく生真面目。律儀に並べられた吸殻がそれを物語っている。

「君は一体何を考えてるんだ？」

僕のたったひとつの質問に彼女は目を見開いていた。

「何を考えているって……私がロアナプラでなんと呼ばれているかわかってますか？」

彼女が初めてロアナプラについたとき、ロアナプラではそこそこの騒動になった。只でさえ日本人は近寄らない土地ということもあり、同じ日本人であるロッキの知り合いでは？という噂がたったのだった。そして、噂は一人歩きする。ただの知り合いだった彼女はいつのまにか彼女になり、嫁になり、そして不倫相手になった。色々と情報

を集めていると「ロックの幼馴染みで小学校の時父親が蒸発し、消息不明となっていた彼女をロックが大学生のときに金で買い取り籍を入れたが、彼は家に帰れば彼女を犯し、家に帰らなければ外で女を侍らす生活をしている」とまで語る輩がいた。……さすがにそこまで飛躍した噂は直ぐに終息するから拡がることはなかった。そして、着いた彼女の二つ名「ホワイトカラーの嫁」である。人畜無害なその見た目と日本人であることから着いたのだろう。

彼女は特に否定することもなく、今ではその二つ名が定着している。

「遂にロックと籍を入れたのかい？それなら、お祝いをしなくちゃね。日本人は奇数を嫌うらしいからね、お祝いは300ドル位でいいかい？」

彼女はさつきまでの何かを含むような笑顔をやめ、普段の人畜無害な、優しく、可愛らしい笑顔に戻っていた。

「籍は入れませんよ。私、そういうのの意味がわからないので。けど、ロックさんならお付き合いくらいならいいかもとは思ってますよ」  
彼女はそういうと振り返り、ドアに向かって歩いていった。

「それではお邪魔しました。また明日、事務所でお会いしましょう」  
満面の笑みを浮かべ、肩の前で小さく手を振っている。

「ああ、そうだね。また明日」

僕も笑顔で手を降り、彼女を送り出す。

また明日も会おうだろう。

そして、明後日も会おうだろう。

そして、彼女は会うたびに満面の笑みを浮かべて僕に駆け寄り「こんにちは」と言うのだろう。小さな体でパタパタと走り、時折見せるいつもと違う笑顔もまた……

「そうか、これが萌えか……」

僕はそう呟きジエーンからのメールがないかメールボックスを開き、を確認した。

BLACK DICK Says Joke In  
THE Dark

御伽が事務所に入るとダッチが煙草を吹かしていた。

「ダッチさん、煙草やめてもらえませんか？」

「ん？どうしたおめえさんはスモーカーだろう？」

そういうと、ダッチは灰皿に煙草を押し付け火を消した。

部屋にはダッチの煙草から出た煙が漂っていた。

「煙草の臭いは好きなんですけど、メンソールがどうも体に合わなくて……なんと言いますか……昔、メンソールを匂っただけで吐いたことがありましてですね（実話）」

御伽はそういうと恥ずかしそうに胸の前で指を弄りだした。

「そうは言われてもな……俺もこいつを手放す気はねえんだ。俺が我慢するかおめえさんが我慢するかどっちかしかねえな」

御伽の指弄りは続く。昔、友人からメンソールの煙草をもらい、いつもの癖で火をつける前に葉を匂っただけで気分が悪くなったことがあったこともあり、メンソールは御伽の中ではちよつとしたトラウマでもあるのだ。

「まあ、確かにラグーン商会でメンソールを吸うのは俺だけだからな、一人が我慢すればそれでいいかも知れねえな」

そういうとダッチはソフトパックから煙草を一本取りだし御伽に向かつて放った。

「だが、そいつはおめえも一緒だ。他のやつらが文句を言わない以上、おめえさん一人が我慢すればそれでいいんだよな」

ダッチいわく、御伽がメンソールを吸えればダッチ自身が煙草を我慢しなくて済む、ということである。

「わかりましたよ……」

御伽はポケットからボックスタイプのパックを取り出した。御伽は普段から煙草の本数が少なくなると煙草の箱の中にライターを入れるようにしていた。御伽いわく、「ライターと箱、別にしたら荷物か

増えるじゃないですか」とのことらしい。

そして、御伽はパックから100均においてあるような鑪式のライターを取り出すと火力が一番小さい状態であることを確認し、火をつけた。

煙草の臭いとともにもんソールの清涼感が口の中を襲う。舌をつつかれるような、喉の奥を侵されるような不快感が御伽の口の中に広がった。

肺まで煙を落とす。気管を清涼感で痛め付けられる。妙な薫りが喉を満たす。

いつも通り鼻から煙を出す。鼻孔をもんソールの違和感が襲う。

結論を述べると御伽は噎せた。日頃タール9mg程度の煙草を吸っているはずなのに、同じ重さであるはずのアメリカンスピリットメーンソールライトで噎せた。

「ほう、嘘じゃねえ見てえだな」

「私はアメスピのもんソールなら噎せます。マルメンなら吐きます。」

御伽はそう言い終わると直ぐに靴の裏に煙草を押し付けた。

「もんソールを吸う人は信用ならないってお婆ちゃんがいつてました」

「そいつは怖えな。でも、信用できねえのはこの街じゃあ当たり前のことよ。信用ならねえ奴等を必死こいて信用ふりしてる。そういう奴等の……そうしねえと生きていけねえ奴等のなんだよ、ここは」

「偽善は嫌いです。」

「偽善じゃねえさ。糞みたいな偽善者から逃れてきた糞の集まりなんだよ。それこそ、世界中の糞の中の糞だけが集められた収容所なんだ」

「糞糞言っているとその口縫っちゃいますよ」

「この町にこれ以上おつかねえ女は要らねえんだよ。ヤポンスキーが背伸びしても俺には怖くともなんともねえんだよ」

ダッチは御伽に近づき、頭を撫でた。

「俺らの世界でここまで小せえのは鉄砲玉しているガキか、もしくは……本当に狂っちゃまった、狂わされちゃったガキぐれえだ。この町の

夜に泣かされるガキどもの声はどうしても俺の耳を放れてくれねえ」  
「何が言いたいんですか？」

「ガキは寝る時間だつてことだ。これからは俺とタイラーの大人の間だ。嫌だとは言わせねえぞ」

ダッチはゆつくりと扉の方へと歩いていき部屋の照明を消した。

「ダッチさん、したいことがあるんならこんな回り口説いことしなくてもいつでもお相手しますよ」

全く見えないがソファの軋む音がする。ダッチが座ったようだ。

テーブルの上にふと、淡い光が零れる。

「ロマンチストなんですね」

「たまにはガキどもの泣く声が聞こえねえ静かな夜つてのも良いもんだろ？」

テーブルの上に大きな容器が置かれる。ガラスの高い音が響いた。

## R i p p e r Ⅱ

レヴィとロックはロアナプラの外へと買い出しに出ていた。ロアナプラを出たとはいえ、治安が悪いことには変わりはない。幾分ましであるというだけで、世界中の無法者達の巢窟であるロアナプラの影響でここも無法地帯となっていた。

「レヴィ、どうして俺ばっかり重たいものを持たせれてるんだ？」

パソコンや車のパーツを両手に抱え、ロックはふらふらと歩いていた。こころなしかその額は汗で輝いていた。

「お前はレデイに重たいものを持たせるのか？そんなんだからチエリーなんだよ」

ロックの数歩先を歩き、小さな紙袋を一つ手にぶら下げてレヴィは煙草を吹かしていた。ふらふらと歩くロックを小馬鹿にしながらふーっと煙を吐いた。

「レヴィがレデイだって？それならダッチだって巨乳の美少女になっちまうよ」

ロックはそういいながら大きく息を漏らした。

「タッチが巨乳？そりゃあいいジヨークだな」

レヴィは大きく笑いながら吸い殻を指で弾き、捨てた。

そして、「ただし」と言いながら次の煙草に火を着けた。

そして振り返り様にロックを睨み付けた。

「わかってるよ。レデイのレヴィにはこんな重たい荷物、持たせられないよ。ここは男の俺が重たい荷物は全部持つからレヴィはその紙袋を持ってもらってもいいかい？」

ロックは両手を挙げ、レヴィを宥めるように、諦めるようにそういった。レヴィは納得したようでソードカトラスにかけていた右手を離した。

二人はならんで歩く。

「ロアナプラに戻る前に昼飯くらい食べていかないか？荷物を一度置きたいし……」

ロツクはそう言いながら肩をすくめ、レヴィに提案した。

「ロツク」

「なんだい？」

「今何時だ？」

ロツクはちよつと待つてと言いながら自分の左手に付けられた腕時計を覗き込もうと四苦八苦しした。

「ちようど一時位だね。飯屋も空き始める時間じゃないかな？」

「OK、どこに行く？」

「この間、ベニーに旨いフォーを出す店を教えてもらったんだけど、そこにする？」

「ベニーの言うことなら嘘はねえな。あのちびっこの言うことなら信用ならねえけどな」

そう言いながらロツクとレヴィは飯屋へと歩を進めていった。レヴィがロツクの歩調に合わせながら。

「レヴィはタイラーのことが嫌いなのか？」

屋体の席につき、注文を済ませるとロツクは単刀直入に聞いた。

タイラーを拾ったときからレヴィの機嫌は優れない。二、三日調子が悪いのであれば流してしまおうと考えていたが、一月以上この状態が続いている。男が触れてはいけけない女性の聖域は越えていると判断したからこそ周りくどいことをせず単刀直入に聞いた。

「嫌いじゃあねえ。ただ……」

そこまで言うのとレヴィは肘をつき、そっぽを向いた。

「ただ？」

「昔からああ言うぶりツ子被っているやつはいけすかねえんだよ」

「その程度のことか」

ロツクは思わず吹き出した。もっと複雑な感情を持っていると思っていたが肩透かしだった。

「ロツク……」

通りを眺めていたレヴィの目がロツクを捕らえる。先程までと違う真剣な目だ。

「殺し屋は自分から名乗り出ないんだよ。いつも血の臭いのしない眼

を一瞬だけ紅くするんだ。わかるよな」

「あの双子か……」

ロックは両肘をつき顔を沈めた。

「ジャックザリッパーは医者なんだよ。覚えときな」

そう言つてレヴィは遅れて出てきたフォーを一啜りした。

フォーをすする様子を見て、ロックもフォーを食べ始めた。そして、ロックは話を切り出した。

「ジャックザリッパーつて言えば、最近物騒な話を聞くな。」

「200年前のいかれポンチ話なんて知るかよ」

レヴィは心底どうでも良さそうにフォーを掻き込んだ。

「ここ数カ月の話さ。毎週末路地裏で誰かが死んでいるだって。明らかに殺しなのに誰も目撃者がいない。そして、被害者の体の一部が切り取られているらしい。で、付いた通り名が『ジャックザリッパーの再来』すなわち『リッパー・ザ・セカンドRipper II』だつてさ」

「カニバリズムか？」

レヴィは途中まですすったフォーを口から垂らしていた。どうやらレヴィの興味を僅かにでも引けた様だ。

「さあ？でも、被害者の小指とか肺とか食べられそうにないところも持っていてるからね……ただのサイコパスじゃないかな？」

ロックはそう言いながらこの町へと侵食され、冷静に状況を整理しようとする自分の心とこの町の連続殺人が平然と起きてしまう現状への溜め息をフォーと共に呑み込んだ。



Fried Face Chase The Shadow of Someone Nobody Knows

バラライカは私室で考えに耽っていた。最近、自分の町で好き勝手に暴れているネズミの処分を検討していた。吸血鬼の兄弟のときのように追い込んでやろうか、ヤクザの娘のときのように全てを壊してやろうか……

扉をノックする音が聞こえる。

「大尉」

バラライカの右腕、ボリス軍曹の声である。

「ボリスか？今は一人にしてくれと言わなかったか？」

ドスの効いた声で返す。夕食後、今回の件に関して熟考するため部屋に籠っていた。

「ラグーンのダッチからお電話です。急ぎ取り次ぎたい話があるとかで」

「悪いが軍曹、私は今忙しい、用件だけ聞き、必要があれば私に繋いでくれ」

ボリスは顔に似合わず気の効く男だ。いつもなら有無を言わずとも必要なときに必要なことをしてくれる。しかし、今日はしなかった。

「軍曹」

バラライカは普段よりも柔らかい声で語りかけた。

「何ででしょうか？」

扉の向こうからボリスの低くも暖かみのある声が聞こえる。

「今回の件、お前はと思う。」

「姿の見えない殺人鬼、追うのは些か苦勞すると思います」

ボリスは率直に自分の考えのみを答えた。犯人が誰であろうと関係はない。この人は自分の目的のためならば何でもする……何でもしてしまう。

「そうだな。しかし、問うべきはそこではない」

バラライカの声が返ってくる。先程よりも僅かではあるがドスの効いた強みのある声である。

「と、申しますと？」

「この町は無法者の巢窟、無法者でさえ恐れをなす無法地帯、ロアナプラダ。人殺しだけであれば気にする必要などない。ただ……」

バラライカはそこで言葉を区切った。

「トリガーハツピーなら身体中がチーズになるまで撃ち続けるだろう。いかれポンチなら死体をバラすだけではすまないはずだ。」

「大尉……仰っている意味が……」

扉の向こうからボリスの困惑したような声が聞こえる。

「悪いな、軍曹。しかし、今回の騒動は技術を持った真つ当な人間が真つ当ではない信条をもとに暴れている。つまりだ、ガキどものときみたくまともな判断ができない相手ではない。もっと頭がいい。慎重で狡猾で大胆なやつだ」

バラライカはロシアンティーを口に含んだ。

「軍曹、電話を繋いでくれ。ダッチと話がしたくなった」

「わかりました」

ボリスが扉の前を離れ、数分としない内に電話のベルがなった。

「ハロー、ダッチ。まだ生きているかしら？」

「お陰さまでピンピンしてるよ。で、今回の件だが……」

「あら、もう犯人の目星がついたの？」

「残念だが答えはNOだ。あんたなら何か掴んでいると思ったんだがな」

「残念ながらこちららもダメ。今回のネズミは全く尻尾を見せないわ。でも、いくつかわかったことはあるわ」

「ほう、お聞かせ願おうか」

「では、まず一つに犯人は持ち物はライフルとナイフ。そして、どちらにおいても確実に急所を一撃で仕留めている。狙われた方も幸運ね。苦しまずに死ぬるもの」

「それは知っている。俺が聞きてえのは……」

「動機？それとも犯人が信じるもの？」

「宗教何てものはどうでもいい。奴さんが何をしたいのか……それだけだ」

「恐らく、犯人は頭がいいわね。それだけはわかる。見つからない場所で見つからない殺し方を見つからないようにしてるもの。しかも丁寧に撃った弾まで回収してる」

「そいつは初耳だな」

「あら、気付かなかったの？ジャックが身体の一部を切り取っているのはフェイク。撃ち殺した人間から弾を取り出しているのよ。その証拠に弾が通った臓器のみが切り取られている。ナイフで殺した相手からは指とか耳とか適当な部位を切り取っている。」

「何かしらの宗教か？」

「さあてね」

「弾の出所はわからねえのか？」

「それはわかっているわ。中国から大量のライフル弾が密輸された記録があった」

「受取人は？」

「J・ランプソン」

「商人か？」

「ええ。あまりお行儀のよくない商人よ。今頃故郷の土の臭いを堪能している頃よ」

「証拠は残さねえか……」

「今回のネズミはとつても頭のいいネズミよ。暴れるだけ暴れたいかれコウモリとは違ってね」

「ここまで情報がねえと策も練れやしねえ」

「そうね。いつかボロを出すことを祈りましょう」

「そうだな。……愛してるぜ」

「私もよ、ダッチ」

そうやってバラライカは電話を置いた。

「日本には窮鼠猫を噛むという言葉があるらしいわね。ネズミが化けないように祈るわ」

葉巻に火を着け、大きく煙をはいた。

One Day That Is Happy  
SS

照由御伽はラグーン商会の事務室にいた。今日は依頼もなく、簡単な事務仕事だけである。

レヴィはソファに寝転がり、ピザを食べながら、コメディ番組を見て馬鹿笑いしている。

ロックはそんなレヴィの横に置物のように座り、細々とピザをかじっている。

ダッチはそのような騒がしい室内を何処吹く風とでもいうかのよう  
に椅子に座り皆に背を向けながら読書に勤しんでいる。

御伽が窓辺でタバコを吹かしているとベニーが近づいてきた。手  
には大きな紙袋が握られていた。

「タイラー、借りてたものを返すよ。なかなか楽しめたよ」

御伽は振り向くとベニーの顔を見て笑顔を溢した。

「楽しんでいただけただけなら幸いですよ。なかなかハイになれますよ  
ね」

「そうだね。僕にはアメリカのそれよりもこっちの方があっているよ  
うだ」

ベニーも微笑みを返す。そして、御伽の耳元へより、囁いた。

「ところで、ものは相談なんだが、君は他のものも持っていたりするの  
かい？」

「これまでとは趣向は違いますが……。少しアメリカンな雰囲気を目  
指したようなものとか、アンチアメリカンなものもありますよ」

御伽もニカツと笑いながら答えた。

「へいへい、ちびっこ。ベニーと何の相談してんだ？パイプか？炙り  
か？シリンジか？」

レヴィがに割り込む。一人コメディ番組を見て馬鹿笑いしながら  
ロックに絡んでいたが、飽きたのだろう。

「少なくとも私たちはこの町に染まっていないつもりです。そんなも

のに手を出しません。私たちは漫画の話をしてるんですよ。」

「コミックだ？スーパーマンか？スパイデイか？どっちにしてもお断りだ。ガキ臭え」

肩の前で手をヒラヒラと振り断った。

「漫画を子供のものなんてえらく前時代的な考え方ですね。その考え方は古いです。今は大人も漫画やゲームを楽しむ時代なのです」

御伽が力説する。実際、御伽も漫画やゲームに関してはおかじった程度ではあるが知識を持っていた。

「例えば、さつきベニーさんに返してもらった漫画はライバルとの熱い戦略線を繰り広げるといって王道展開の中で本当の正義とは何か？理想とする世界は何かという人類永遠のテーマに対するアンチテーゼとして老若男女に指示を得て、実写映画化、ドラマ化し、さらに映画の続編も作られるという日本ではもともとメジャーな作品の一つでもあるんですよ！」

タイラーは熱弁する。誰しも自分が好きな作品を無下にされるのは気分のよいものではない。

レヴィの（タイラーと比べれば）大きな胸に顔を沈めるほど詰め寄った。

「ロック！何て言ってるんだ？」

レヴィが御伽を指差しながら、ロックに問う。

御伽を見つめるその視線はもはや見下すような角度になっている。

「この作品は生死観について倫理的、宗教的な観点から逆説的に問うもので、王道的な役割を持ちながらも、その素晴らしい内容からアニメ化も実写映画化もされる、日本人なら誰しも一度はその名を聞いたことのある人気なものだって」

ロックは肩をすくめ、レヴィに可能な限り分かりやすく説明した。

「で、お前もこいつを読んだのか？」

レヴィの指が御伽の手にある紙袋を強く指した。

「まあ、タイラーの言う通りこの作品は日本人なら一度は名前を聞いたことがあるような作品だ。映画も見たし、単行本も揃えたよ」

レヴィの指がわなわなと震える。顔を見てみると目を大きく開き、

今にも「お前もか、ブルータス」とでも言いそうな具合になっていた。

「残念ながらレヴィ、ここでのマイノリティは君のようだ。」

「けっ、いつからラグーン商会はピーター・パーカーの巣窟になったんだ？なあ、ダッチ」

ダッチは椅子に深く腰かけたまま、読んでいた本を閉じるとレヴィにもよく見えるように表紙を肩の横から覗かせた。

「残念ながら俺もだ、カエサル殿」

そう言っただッチは大きな笑顔を溢した。

## Conditions Of Hero

ラグーン商会のメンバーは足取り重く、ホテルモスクワへと向かっていた。

中でももつとも足取りが重いロツクはベニーに耳打ちしてていた。「なあ、あんたはなにか心当たりがあるかい？ラグーン全員でしかも互いにボディチェックをさせられたなんて俺の記憶が正しければこれが初めてだ」

「残念ながら僕の頭の中で巡っている疑問も君と全く同じものだ。そして、僕からの答えは一つ、「I don't know」だ」  
ベニーがロツクに答える。

ロツクの足取りが一段と重くなった。その様子は落胆という言葉がもつとも相応しかった。

今、ラグーン商会が持っているのはレヴィのソードカトラス一丁、そして、ダツチの財布のみであった。他には一切も持つことが許されず、レヴィもポケットに手を突っ込み、肩を振りながらだらだらと不服そうに歩いていた

呼び出したのは言うまでもなくバラライカ。用件は到着し次第伝えるとだけ言われていた。

「なあ、ダツチ。姉御は何の用事で私らを呼んだのさ？」

「さあな。ただ、銃を持ってくるなってわざわざ言うくらいだ、きつと楽しいピクニックが待ってるさ」

「姉御とピクニックなんて丸腰でベトナムのジャングルに放り出されるのと変わらねえよ」

「ちげえねえ」

レヴィとダツチはロツク達、常識人組の数歩前を歩きながらジョークを交わしていた。

これから起こる悲劇など知らずに。

「さあ、Boys & Girls、地獄の門が近づいてきたぜ。ちやんと小便は済ませてきたか？それと、教会に行きたいやつは今のうちにいっておきな。キリスト様に会える最後の機会かも知れねえから



な」

そう言つてダッチはいつものように大きく口角を上げ、いつものように黒い肌に映える白い歯を見せた。

「この近くに神社はありますか？」

御伽が手を上げながら申し訳なきように尋ねた。

「残念ながらタイラー、神道は日本独自のものだから神社はないだろうね」

ベニーがタイラーの問いに答える。

それを聞いた御伽は肩を落としとぼとぼと歩きだした。

「そうだな。物事に諦めつて言うのは必要なもんだ。特におつかない生物の前ではな」

御伽に続き、ダッチが歩み始める。そして、他のメンバーも足を引き摺りながらも一步、一步と地獄へと歩を進めるのであった。

ホテルモスクワにつくと、まず、ボディチェックを受ける。許されたもの以外持っていないことを確認されると、最後にレヴィのソードカトラスさえも取り上げられてしまった。

「ダッチ、どう思う？」

ベニーが心配そうにダッチに尋ねた。

荒事専門の運送屋と言つても身内であるはずのホテルモスクワに、そして、バラライカに警戒されるなどはじめてのことだ。

特にダッチはバラライカからこの町で最もとも言えるほどの信頼を勝ち取っていたはずである。

「さあ？」つ言えるのは歓迎されてねえつてことくらいか？」

ダッチがそうベニーに耳打ちすると、ベニーの足取りが一段と重くなつた。

バラライカの部屋の前につく、ロックは人生で最も短く、長く感じる時間に顔の筋肉を締め付けられたかのように表情筋が痙攣を起こしていた。

ダッチが扉をノックし入る。

それに続いて他のメンバーもゆっくりと入っていった。

「やあ、姐御さん。何か御用ですかな？」

「ダッチ、私は今、すごくイライラしているの。メキシコの悪ガキ共を掃除したいくらいにね」

「是非ともお願いしたい……と、言いたいところだが、今の標的はジャックさんじゃねえのか？」

「そうよ、ジャックを見つけるために部下達をそれこそロアナプラ中に配備して警戒させていたわ。で……」

「情報は一切ないってことか」

「一つ大切なことがわかったのよ」

「ほう……」

「警備を完璧に掻い潜ることのできるって言うことがわかったわ」

「それは素晴らしい情報だな」

バラライカは加えていた煙草を灰皿に強く押し付けた。小気味いいさくさくという音が部屋に響く。

「そこでロックにお願いがあるの」

バラライカがレヴィの横で目立たないように振る舞っていたロックへと視線を動かす。

ロックはバラライカの視線を受け入れ、「もしかして……」とだけ小さな声で呟いた。

「流石ね。察しのいい男は好きよ」

そういったバラライカは頬杖について微笑み、

そう言われたロックは額にてを当てて苦痛の表情を漏らした。

そして、額にてを当てた状態で少し考えたロックは顔を上げた。

「バラライカさん、いくら俺でも19世紀の亡霊を見つけないことなんて出来ません。ジャックについて知っていること、今段階で推測していること全て教えていただきたい」

「ロック。やはりお前は小悪党の水兵なんて似合わないな」

バラライカは肩を弾ませながら、これからのロアナプラの行く末を楽しみにしていた

Quiz for Elite mariners  
who is being Dirty

ロックは自室に籠り、情報を整理していた。

被害者の素性、これまでの犯罪歴、ホテルモスクワが目光らせていた場所、そこからの死角、凶器の入手経路……

纏めるべき情報はそれこそ山のようにある。そして、これだけ情報を集めても犯人に関する情報は一文もなかった。

犯人はこの町をよく知る人物である。

……そうでなければ都合よく路地裏で殺人が起きるわけがない。

犯人はホテルモスクワに関係を持たない、もしくは敵対している。

……そうでなければバラライカの堪忍袋を切るようなことをするわけがない。

犯人は大柄の男である。

……そうでなければスナイパーライフルなんて代物を持ち運べるわけがない。

犯人は格闘術を身に付けている。

……そうでなければ悪漢に対してナイフで致命傷を負わせることは難しい。

犯人は……

ここでロックの思考が止まった。

「ダメだな……」

自嘲気味になりながら煙草に火をつけ、大きく吸い込み、吐き出した。

犯人に関する情報はバラライカから直接伝えられた頭が切れることと何か異質なものを信仰していること、そしてかなりムカつくやつである。これらのみであった。

そして、それらもダッチとバラライカが冗談混じりの電話で話したものだという。

情報は無に等しい。

扉をノックする音が聞こえる。

レヴィの荒いノック音とは違う。

ダッチの力強いノック音とは違う。

「タイラーか？」

扉がゆつくりと開き黒いボブカットが見えた。

「そうです。私です。煮詰まっているようなので温かい飲み物を持ってきましたよ。」

そうやって御伽は二つのマグカップを差し出した。

「コーヒーとココアどっちが飲みたいですか？因みに私は甘いものは好きですけど、苦いものは大嫌いです」

御伽はそうやって二カツと笑った。無邪気なその笑顔は暖かく、優しさに溢れていた。

「それじゃあ、ありがたくコーヒーをもらうよ」

「優しいロックさんならそういつてくれると思いました」

御伽はコーヒーの入ったマグカップをロックに渡すと、ココアの入ったマグカップに口をつけながら、ロックのベッドに腰掛けた。

「どうですか？煮詰まっていますか？」

「そうだね。ここまでいろいろんな情報を集めてみたけど犯人に関して有力な情報は皆無。わかったのはジャックザリッパーが実は19世紀に死んでいたことくらいだよ」

ロックがマグカップに口をつけすするのを見ながら御伽は立ち上がった。

「君はどう思う？その見事な推理力と妄想で俺のいた会社を一時的にでも傾けさせた来ヶ谷乃愛さん」

「そうですね」

御伽がロックの書き込みがある地図を眺める。

犯行時刻や現場の写真などさながら刑事のような書き込み具合がある。

「私はこの地図を見て犯人が複数人であると推測します。まず第一にホテルモスクワの巡回を掻い潜りながらターゲットを見つけて、路地裏に誘うなんて難しいと思うんですよ。そして、実行犯の他に共犯が

いるとするならば、ホテルモスクワの内部に裏切り者がいる可能性がありますね」

御伽は顎に手をあて、唸るようにしながら持論を述べた。

「もちろん、俺もそれは考えた。しかし、その裏切り者のメリットはなんだ？ 金が入るわけでもない。長年共に過ごしてきたバラライカさんやそのあり方に文句があるのなら彼らなりのやり方で伝えるだろう」

御伽は蜂の巣になったバラライカを想像し、考えるのを止めた。

「でも、その周辺組織なら話は違うのかも……」

直属の部下ではなく、連携をとっている組織ならば、バラライカのやり方に合わない人間もいるかもしれない。

「しかし、それでは巡回のルートなんかを手に入れる手段がなくなるんじゃない……」

「ハッキングなんか得意な人ならそういうの情報を盗んだりできるのかもしれないね」

ロツクは御伽の持論を聞き、軽く吹き出した。

「この荒くれものの集まる町でそんなことができる人間が何人いる？ 皆無だ」

「皆無ならそこから人間を絞りやすいんじゃない……」

ロツクは話を御伽の話を途切り、部屋の外へと押し出した。

「ありがとう、タイラー少しは答えに近づいたのかもしれない。今日はまだもう遅いから帰りな」

「でも……」

「俺も今日は直ぐに寝るよ。一度頭を整理したいからね」

御伽はわかりましたと言って自分の部屋へと向かった。

……Q. E. D

……Quiz for Elite mariners who  
is being Dirty

……汚れ続ける優秀な水夫への挑戦状

Becky to walk the hell

「で、二挺拳銃様が教会になんのようなんだ？」

エダの声がチャペルに響いた。

「うつせえぞ、エダ。客なんだから酒くらい出せよ」

レヴィが声を荒げた。

話は一刻前に戻る。

今日は仕事もなく、ロックを飲み誘おうとレヴィはロックの部屋を訪れた。

「おいロック、そろそろにらめっこにも飽きただろ？飲みにいこうぜ」  
「あ、レヴィさん。今、ロックさんはお風呂に入っているので少し待っていてください」

照由御伽がいた。御伽は部屋の整理をしながら、レヴィにロックが忙しいことを伝え、穏便にレヴィの誘いを断った。

レヴィは面白くなかった。

ロック本人に断れるのならまだしも、ロックに会うことも許されず、一方的に断れたのだ。

レヴィは面白くなかった。

メイドが二度目にこの町に現れたとき、ロックは同じように自身を削るようにしてメイドの行き先を推測していた。

そのときは部屋に籠り、誰にも会おうとしていなかった。そのときは、警告を無視したロックの単独行動だったのでそれも仕方ないと思っていた。

しかし、照由御伽は難なくロックの部屋に入り込んでいた。

「けっ、ジャップ同士仲良くしてたって言う訳か。面白くねえ」

「そうですね。中はよかったですね」

「はっ」

「冗談ですよ。私がおここに居るのはただの好奇心からですよ。お手伝い以上のことはしていません」

御伽が笑っていると、ロックが風呂から上がってきた。

「ん？なんだレヴィ、来てたのか」

レヴィの顔が真っ赤に染まる。もちろん怒りで……

……

「で、ここに來たって訳か……」

「わりいかよ」

レヴィが机に突っ伏して顔だけをエダに向けて呟いた。

「それがよくねえんだよ。今日はNPOから豚共が視察に來るんだよ。で、私は今、倉庫の整理。シスターはこの町でまともなやつらを何人が集めてミサを開く準備をしてる。何で急に來るんだよ。いつもは前以て報せる癖に……」

エダはぼやきながら倉庫の方へと向かっていった。

「武器隠しはキツチリやれよ。ここがばれたら私らも仕事がしにくくなるからな」

「わーってるよ」

レヴィの忠告に対し、エダは左手を挙げて応えた。

レヴィはシスター・ヨランダから仕事を押し付けられることを恐れ、静かに教会を離れた。

「教会がダメならどこにいくかな……」

暴力教会から逃れたレヴィは市場を歩いていた。

暇なときにレヴィがいく場所は限られている。

暴力教会でエダとポーカーをしながら酒を飲むか、イエローフラッグに行き、他の客と飲み競べをするかである。

暴力教会は無理だった。

イエローフラッグにも行ったが、バオの話では最近のリッパー騒動のせいで週末は客足が遠退き、店を開けないことにしているらしい。

何処に行くか、どこで暇潰しをするかを考えていると、見知った顔がレヴィの前を通った。

「へい、ロットン！」

男が振り返り、銀髪が揺れた。かけられたサングラスから男の表情は読めない。黒いマントをはためかせ、男はサングラスに手を掛けた。

「二挺拳銃ではないか。どうした？」

男は落ち着いた声でレヴィに答えた。

「シエンホアはいねえのか？」

「今は別行動中だ。最近、安息日を悪夢に陥れる不屈きな輩がいるからな。こうやって悪を殲滅せんと見廻りをしているのだ」

男はサンングラスを軽く持ち上げた。

「あいつが動くってことは、賞金でも出たのか？」

男の意味のない行動に突っ込むこともなく、レヴィは話を続ける。「知らなかったのか？今やRipperⅡの首には黄金が掛かっているような状態だ。国家の犬共も姿の見えぬ暗殺者に苦勞しているらしい」

そう言って、手配書のコピーをレヴィに見せる。

不思議な手配書であった

WANTED / DEAD OR ALIVE / Ripper  
Ⅱ NO. NAME ,,

「指名手配／生死問わず／切り裂きジャック二世（本名不明）」

手配者の名前が載っていない。そして、顔写真、もしくは似顔絵が載る欄には、黒塗りの人の型をした記号が載っており、,, No Image ,, とだけ書かれていた。

「こんな手配書意味あるのか？」

「わからん。国家の犬共もこれで本物が釣れるとは思っておらぬのかもしれない。あわよくば、力なき市民が警戒すれば……」

「なるほどな……」

男は情報を持たぬ手配書を懐に直し、マントをはためかせながら振り返った。

「それでは、俺は悪を見つげるため、行かせてもらう。女よ、夜道には気を付けることだな」

そう言って男は歩いて行った。

悪を決して許さぬ男。ロットン・ザ・ウィザードは夜の道歩く。悪を殲滅するため、力なき市民たちを守るため、今日もどこかで悪と戦うだろう。



頑張れロットン！頑張れウイザード！

## Why Born People

「ママ、何で私は幸せなの？」

「それは幸せな家の子だからよ」

昼下がり、広い屋敷の中で、子供とその母が語り合っている。

部屋にはわずかに西に傾いた太陽の強い光が注ぎ、白い部屋の中を照らしていた。

「何でうちは幸せな家なの？」

「それはママとパパが幸せな夫婦だからよ」

地元の名家、昔より続く由緒ある家庭。誰もが羨む幸せな家庭がそこにはあった。

「何でパパとママは幸せなの？」

「お互いがお互いを信頼して、一緒にいたいと思っっているからよ」

母親に再三疑問をぶつけているこの少女もいつかは御令嬢として様々なパーティーなどに参加し、出逢い、どこか有名な名家に嫁ぐのだろう。

「幸せってすごいんだね」

「そうね。幸せって素晴らしいことね」

お伽噺のシーンを切り取ったかのような幸福が少女を包む。親に愛され、人に愛され、友に恵まれ……

「私の生活が幸せなら、あの人たちは幸せじゃないのかな？」

「あの人って？」

「ときどきうちに来るおじちゃん。いつも泣いてるし汚れてるし……幸せじゃないのかな？」

少女の家は名家であった。そして、多くの犠牲のもとに今の生活が成り立つことは、少女の知るところではなかった。

笑顔で純粋な疑問をぶつける娘の突然の切り出しに母親は驚いた顔を見せる。

「あの人……」

「私はママがいて、パパがいて、じいやもメイドのおねえちゃんもいて幸せだよでも、あのおじちゃんには何かあるのかな？」

屋敷の回りには田畑が広がっている。そしてその土地は全て少女の父のものであった。周辺の農家は少女の父から土地を借り、ジャガイモなどを作ることで生活をなんとか続けていた。

そして、違法とも言える金額で土地を借りた農民は生活が苦しくなると当主の元へ来て、金の工面について、土下座の覚悟で頼みに来ているのであった。

「あの人には何かがあるの？」

「あの人はお金がなくて何も持てないの。でもきつと私たちが持てないものを持っているわ」

少女が立ち上がり窓に近づく。昼の強い光をバツクに白いドレスが輝いて見えた。

「ママ、私わかったわ。あの人たちを幸せにする」

「私たちの幸せはあの人たちが作ってくれたものでもあるのよ。私たちは今が一番幸せなのよ」

母親は今の、農家が多額の税を納めることで成り立つ裕福な生活を手放すことを拒んだ。

「誰かが苦しんで私たちが幸せになるなんて嫌だ！私はみんなが幸せがいいー！」

少女の絹を裂くような声が屋敷中に響いた。

「人は一人では幸せになれないの。誰かの助けで幸せになれるのよ」

「私知ってるもん。そういうのを犠牲って言うんでしょ？私が幸せになるために誰かが傷つくなんてダメ」

白く大きな屋敷の一室で少女は涙ながらにそう訴えた。

## GOOD or EVIL

来ヶ谷乃愛は自室のパソコンでメールボックスを覗み付けていた。

「照由先生の記事は裏付けもすっかりとしており、情報の信憑性は高いと言えますが、〇〇衆議院議員の汚職問題に關しましては本誌、週刊福音”の編成上組み込むことができないことが決定いたしましたので報告させていただきます。今後とも照由先生の書く記事を編集部一同心待にしております。そして、今回の記事に關しましては、本誌に掲載されることはありませんが、先生の手間賃として二万円を指定の口座に振り込みます。ご確認のほどよろしくお願いいたします。」

要約すれば、件の議員が金を使って編集部に圧をかけた。手切れ金は払ってやるから、二度と記事を書くな……とのことである。

「世知辛い世の中ですね……」

御伽は呟きながらタバコに火を着けた。

政治家に圧をかけられたのであれば週刊誌の一ジャーナリストでしかない御伽にはどうすることもできない。

「さて、どうしたものか……」

他の雑誌に移るか？

恐らく既に手回しされている。何処で書こうとしても差押えられるだろう。

ライターを辞める？

それだけはある得ない。御伽の目的のためにこの職だけは失うわけにはいかなかった。

自費出版か？

それは無理だ。経費もかかるし、もし相手に名誉毀損で訴えられたら逃れようがない。あいつらは金で何でもしてくるようなやつらだ。ふと、テレビに目をやると最近、巷で噂になっている「圧倒的な力を持つがために苦悩するヒーロー」のコミーシャルがあっていた。

「スーパーヒーローか……私のところにも来てくれないかしら……」

昔は憧れていた。悪を滅ぼすヒーローに、決して自分の素顔を晒す

ことなく淡々と悪を成敗するヒーローに、悪しきを挫き、正義を愛するヒーローに……

小さい頃、母親の「暴力的な描写が教育に悪い」という一言から見るのが許されず、母親の目を盗んでは頼んで録画してもらっていたヒーローものの番組を見ていた。

「ヒーロー……仮面……覆面……」

御伽はそこまで言うとなにかを思い付いたようでクスクスと笑い始めた。

「そうよ。ヒーローがいるのはTVの中だけ……、ならば私がヒーローになればいいじゃない。本名も年齢も一切不明のフリーライター……、世界のおかしいところ悪いやつらを徹底的に懲らしめる……格好いいじゃない」

そう言い終わるが早いか、御伽は再び机に向かった。

匿名投稿じゃ意味がない。私が、照由御伽が、正義のフリーライターが悪いやつを懲らしめている証拠が必要だ。

来ヶ谷乃愛

嘘つきで狡猾、本名を隠しながらも悪い人間に罰を与える。素晴らしい名前じゃないか。

……しかし、問題がある。無名のフリーライターといっても、今回のように内容によつては記事を止められるかもしれない。

ならば、誰も信じないような内容にすればいい。

適当な証拠、適当な文章……それでも心当たりがある人間からすれば驚異になるだろう。そして誰も信じないような内容ならば、雑誌も恐れずに載せることができるかもしれない。

ここまで決まれば実践あるのみだ。

手始めに、最近怪しい金が入っていると耳にした旭日重工を相手にしてみよう。

No One …… Me

ロツクはバラライカに電話を掛けていた。

「こんばんは。バラライカさん」

「どうかしたか、ロツク？」

くわえていたタバコを灰皿に押し付け、ロツクは話を切り出した。

「色々考えたんですが、なかなか答えがでなくって……」

ロツクは申し訳なさそうに頭を掻きながら軽く頭を下げた。

サラリーマン時代に身に付いた……身に付いてしまったどうしようもない癖である。

「で？」

バラライカはロツクの言葉に裏があることを読み、更に話を促した。

「暫くホテルモスクワの警備に同行してもいいですか？部屋で考えているよりも何か見えてくるかも知れないので……」

断られると思っていた。自分が足を引っ張るのを恐れ、断られると思っていた。

電話の奥でバラライカが誰かと話す声が聞こえる。

恐らくボリスであろう。

永い沈黙の末、バラライカの声が聞こえた。

「お前がそうしたいのならそうすればいい。ボリスにもお前の警護を任せるように伝えた」

予想外の答えにロツクはすぐに返答することができなかった。

ようやく頭の整理がつくとロツクは頭に浮かぶ疑問を本人にぶつけた。

「いいんですか？」

「自分から志願しておいて今更怖じけついたらか？理由は早く私の町で好き勝手に暴れているネズミを捕まえない……ただそれだけだ」

バラライカの声から受話器越しでもわかる隠しきれないほどの怒りを感じたロツクはそれ以上掘り下げることなく、時間の指定だけを聞き、受話器をおいた。

ロックは息を吹き出しながら椅子の背もたれに全体重を懸けた。

「事件解決に一歩近づいたようでよかったです」

御伽が両手にコーヒートココアが入ったカップを持ち、そのうちコーヒートをロックに差し出しながら声をかけた。

電話に集中していたためか足音に気付かなかったロックは慌てて振り向いた。

「タイラーか……驚かささないでくれ……」

「あら、ロックでもした方がよかったですか？でも、ワンルームのこの部屋にロックするような扉はないようですね」

御伽が笑いながらからかう。人畜無害、天真爛漫……そう形容するのが相応しいとロックは考えながらコーヒートを手に取った。

「タイラー……君には本当によくしてくれるね」

「当たり前じゃないですか。人殺しは悪いことです。私は悪い人が嫌いなんです」

笑顔のままタイラーが語る。

ロックはそのようすを眺める。そして、御伽の口が閉じたことを確認すると、静かに口を開いた。

「レヴィも嫌いかい？」

御伽は目を見開き、その質問の意図するところを探った。

傾き始めた月明かりが優しく二人を照らす。

「それはレヴィさんが私のことを嫌っていることをどう思うか？という質問ですか？」

首を傾げ、尋ね返す。

「ああ、君なら気づいているだろうが、レヴィは君のことを……何と言うか……」

「嫌っているですよ？嫌っているというより、理解も信頼もないと言った方が適切かもしれませんけど」

ロックの言葉を遮り、タイラーが口を開く。

「残念ながら、私は人が人のことをどのように感じているのかについては鋭い方です。皆さんが私のことをどう考えているのかについてはおおよその検討はついていますよ」

「それならいいいんだが……」

「私がレヴィさんをどう考えているのかについてでしたね」

御伽はココアを一口啜り、口を離す。彼女の薄い唇が湿り、部屋の僅かな光を反射させた。

「私は人にどう思われていようと、何かしらの感情を以て接して貰えるだけで素晴らしいことだと思っっています。なので嫌われていようと、私から嫌う理由にはなりません」

最後に無視は辛いですからね、と冗談を付け加え、御伽は再びココアを啜った。

ココアの甘ったるい香りのなかで御伽は昔のことを思い出した。

地主の娘

一家殺害事件の生き残り

インチキ記者

正義の記者

日本人

誰もが「照由御伽」としてではなく何かしらのレツテルを貼り、そのイメージの少女を愛した。

誰も私を理解してくれないです

誰も私を見てくれないです

誰も私を愛してくれないです

誰も私を信じてくれないです

誰も私を支えてくれないです

誰も私を助けてくれないです

誰も私の声を聞いてくれないです

世界で一番不幸な私はどの私でしょうか？



# Quod Erat Demonstrandum

犯人は賢い

犯人は自己顕示欲がない

犯人は異質な何かを信仰をしている

以上。

ロックがバラライカの依頼を受け、部屋にこもってから二週間が経った。そしてこの間にも金曜日と土曜日の夜にそれぞれ二人ずつ、すなわち計8体の死体が闇の町の最も暗い場所で発見された。

狙いがわからない

動機がわからない

人々は切り裂きジャックを恐れ、夜の町を出回る頻度が減った。銃声と悲鳴で埋め尽くされてきたロアナプラの夜は静まり返り、『悪の中の悪が集う闇よりも黒いロアナプラ』は夜の間だけではあつたがその姿を潜ませていた。

安息日が過ぎればブルーマンデーを迎え、誰が殺されたのか耳に入る。そして、噂を聞いた悪漢は『明日は我が身』と自分に言い聞かせ、裁きの順番が自分に回ってこないことを祈りながら床に着く他なかつた。

「この町は平和になった。ロック、君もそう思わないかい？」

根を詰めすぎ、やつれていく様子を心配した御伽から外出命令を出されたロックは町をさ迷い、買い出しに出ていたベニーに拾われた。

そしてその帰り、タバコを吹かせながらベニーはロックに訪ねた。「そうだな。このままだと日本よりも平和になる日が来るかもしれないな」

助手席の窓から虚ろな目で空を眺め、煙を吐きながらロックは答えた。

ベニーは笑った。

「それはいいや。いつか僕やダッチ、更にはレヴィまで君みたいにスーツを着こなす日が来るかもしれないね」

ロックはアイロンの綺麗にかけられた、真っ白なスーツを着こな

し、左手には暑さから脱いだジャケットをかけ、右手には黒く、飾り気のない携帯電話を持ち、取引先からの一方的な怒りの声を右耳に受け、何度も頭を姿の見えぬ取引先に下げるダッチを想像し、苦笑いを漏らした。

「この町の観測者である僕からすればそれはとても面白そうだけど、同時に死ぬほどつまらないものだ。君もそうだろう？」

「この町を観測するには所属する集団の影響力が強すぎる」

「誰しも僕達の名前を聞けばラグーン商會をイメージする。そしてバラライカと密接な関係を持つダッチを想像する」

観測者は安全でなければならぬ。そう付け足しながら、ベニーは白煙をはいた。

外出の際、財布と煙草を持つように拳銃の携帯が必要なこの町では生き残るために何でもする。

自らも拳銃を携え、大きなグループに所属する。

どんな汚い仕事であってもこなし、小金を稼ぐ。

「マリア様はこの町の存在を忘れてしまったんだ。弱者は地面に近いところを歩くしか術はない」

「弱者は地面の中へ、強者は天国へ、貧民は貧民の血に汚れたピストルを拾い、富豪は人が付属されたピストルを買う。全くをもって公平な町だよ、住民全てが拳銃を持つことになるんだから」

ベニーはそう言いながら口角を上げる。

「あんたは平和が好きか？」

「僕のことを誤解しているようなら訂正するよ。僕は面白いことを眺めているのが好きなんだ。君の雇い主と同じ考えさ。そこで平和を求めつつもりはない」

平和を嫌う理由もないけどね。

そして、ベニーは三本目の煙草に火を着けた。

ロツクが笑った。

顔に手を当て、天を仰ぎ、高らかと、悪を抹殺する悪の如く。

「ベニー、あんたに最後の質問だ。最近、ハッキングした、もしくははされた記憶は？」

「そうか、終わったのか。それはいいことだ。気分はさながらニアかい？」

「いいや、俺はキラが畏れた唯一の人物……Lだ」

It was stained in evil

悪には悪の理由がある。

善には善の理由がある。

周囲の人々は人々は悪に理由を求めない。

周囲の人々は人々は善に理由を求めない。

世間は悪は理由なき、絶対的な悪であることを求める。

世間は善は理由なき、絶対的な善であることを求める。

ロツクは結論を求めることを怖れていた。自分の考えが正しいと  
いうことを誤りであることを祈った。

「ジャック」が絶対的な悪であることを怖れた。

「大丈夫か？」

ボリスの低く、落ち着きのある声がロツクの思考を阻害した。

「悩んでいるようだな」

凶星。僅かな沈黙。

「悩む」単純な単語である。

しかし、その単純な単語がロツクの複雑に絡まったロツクの頭  
のなかに表すのに最も適していた。

ロツクの考えている最悪の結末。そこへ向かう最短の道筋を辿り  
続けている。

「例えば、ボリスさんが最も信頼を置く人物……そう、バラライカさん  
がこの件の黒幕だったとして、ボリスさんはどうしますか？」

「自分は大尉と共にいたいからいる。大尉を止めようと思うことはな  
い。自分達はそういう集団だ」

軍人として、第三次世界対戦を戦うために生きてきた彼らはバラ  
ライカによってその存在意義を確立させている。

バラライカの立つところが彼らの立つべき場所であり、バラライカ  
の死ぬ場所が彼らの死ぬべき場所なのである。

世界が「平和」という宗教に踊らされ、彼らが必要とされなくなっ  
た現代でさえ、バラライカの今は亡き軍人としての偶像を求め彼らは  
アンダーグラウンドの世界に潜った。

その圧倒的な信頼関係とも呼べる脆さ、硬いものほど壊れやすい、そんな強さと弱さとの両面を「ホテルモスクワ」は持っていた。

「ボリスさん……」

ロツクの弱々しい声がモーターの屋上から夜の町へと響き渡る。

ボリスは何も言わずただただロツクの顔を覗き込んでいた。

「何故人は悪いことをすると思えますか？ 稼ぎたいなら真つ当な手段もある、違いますか？」

「自分がアフガンにいた頃、敵兵をスナイプしようとスコープを覗くと、若い女とまだ十才にもならないような子供がいたことがある」

ボリスの声が普段よりもさらに一段と低くなった。

夜の東京の雑踏の中では消えてしまいそうなその弱々しい声をロツクはただただ聞いていた。

「不審に思い、仲間が二人で様子を探るため近づいた。次の瞬間にはアフガン兵のRPGで四人とも消し飛んでいた。自分は我を忘れてしまい、弾の出元へと駆け込んだ。」

ボリスは大きく深呼吸をした。

「撃った本人は何と言ったかわかるか？」

「……」

ロツクは悩む。状況を想像し、相手の置かれている状態を想像した。

「気がつかなかった……ですか？」

ボリスは笑った。

堅物な男の顔が歪むことはなかったが、僅かに笑い声が漏れた。

「ロツク、残念ながらこれは道德の問題じゃない。絶対的な悪の心を持つものも、人助けが趣味という変人もいない。」

「彼はこう言ったんだ。『二人は勇者だ！ ロシア兵士を二人も道ずれにした!!』とな」

「彼らにとってロシア人を殺すことが正義、そのためなら自らの命すら軽い。ロツク……」

「はい」

「街中で一人殺せば悪人かもしれないが、戦場で百人殺せば英雄だ。」

善と悪などその程度のものだ。悪を悪だと気づけないものもいる。悪しか知らないものもいる。……それが自分の答えだ」

再びの静寂。

遠くで走る車の音さえ聞こえる。星の瞬く音すら聴こえるような時間。

「口下手ですまない」

そう言ってボリスは双眼鏡を覗く。

「いえ、話せてよかったです。おかげで俺の考えが間違っていないことを確信しました」

ロックも双眼鏡を覗き、ジャックを探した。

「男二人でこんな暗がりにくつつき合ってやーらしーですね」  
後ろで声がした。

# Blue Train—RINDA

「何しているんですか?」

『ジャック』が尋ねる。

ロツクは振り向けない。振り向いたら『ジャック』の正体が判明してしまう。

……シユレデインガーの猫

……ブラツクボックス

「ジャックの正体はわかりませんでした。尻尾の毛すら掴めませんでした」

バラライカにこう報告すれば全てが丸く収まる。被害者は全員悪人だけだ。悪いやつが死んで困る人間がどれだけいる?

いない。

考えが纏まり、ロツクは立ち上がった。

ボリスが止めようとする。

ロツクはボリスの制止を無視し、ジャックの方へ体を向けた。

「タイラーじゃないか。こんなところで何をしてるんだ?」

平然と話しかける。しかし、ロツク以外は気づいていた。脚がすくんでいる。

なにかを恐れていた。

なにかが現実になることを恐れている。

「何って、趣味ですよ。趣味のお仕事」

「誰かに依頼されたのか?」

「ああ、ロツクさん、何か勘違いしていませんか?」

月光が『ジャック』を照らす。

顔が見える。

見間違えるはずがない。

照由御伽であった。

「私は私の目的があつて、私のために、私がしたいからしてるんですよ。脅されたり、ルーマニアの双子みたくイカれた信心を持っている

わけでもありません」

ロツクはその言葉を聞き、安心してしまった。

一歩近寄る。

「そうだよな。タイラーがこんなことするはずがない。人殺しな……」

「人は殺してますよ」

飄々としている。

普段と変わらない。

物腰の柔らかい言葉遣い、人畜無害な小動物のような笑顔。

全てがいつも通りであった。

長い沈黙。

静寂……

「嘘だろ？」

声が僅かに裏返る。

めまいがする。

「信じてくれないんですか？」

御伽は持っていた鞆を漁る。

中から真空パックが出てくる。

何故か真空パックはドス黒い赤色で染められ、中に何が入っているのかわからない。

「な、何が入ってるんだ？」

額から流れ落ちる汗が頬をつたい、顎から落ちるのがわかる。

「そうですよね。これじゃあわからないですよね」

御伽がジツパーを開け、手をいれる。固体とは思えないような、液体でもないような不可解な音を立て中を漁る。

真空パックが流体のように波打つ。

ところどころ固体のようなイボが見受けられる。

「これなんかどうですか？」

御伽が手を出す。真空パックと同じようなドス黒い赤色に染まった左手には同じ色の固体が握られていた。

「これは、カッターロツカーと呼ばれた連続バラバラ殺人の犯人、デイ



ビット・ルートの肺です。刺し加減を間違えて斜めに刃が入ってしまったんですけど、意外と綺麗に残ってくれました。それとですね……」

小学生が庭で拾ったおもしろいかたちの石を担任に見せている、そのような雰囲気すらある。猫がスズメをくわえて主に見せるような、ギザ十のコレクションを友人に見せているような……

そのような軽いノリでこれまで殺してきた悪漢の身体の一部を殺したときの印象やちよつとした蘊蓄を混ぜながら嬉々とした表情で語る。

「ロツクー！」

後ろから声がし、ロツクは慌てて振り返る。

ボリスが目の前現実を受け入れられず、困惑した表情を見せる。幸い、御伽は手元の玩具に頭が一杯でこちらに気を懸けていない。一旦引くべきである。ロツクはそう考え、ボリスに伝える。

そして、ボリスも目の前現実を受け入れるには時間が必要である、そして、実質戦えるのがボリス一人であることを怖れ、引くことに同意した。

しかし、ここはビルの屋上。

「ボリスさん」

「ん？」

ロツクが策を講じる。

内容は単純、威嚇射撃をし、ビルから飛び降りるというものである。ボリスはロツクの算段にのつた。

わずかな空白。

ロツクの携帯のバイブレーションと共にロツクが合図を出す。

ボリスが構え、御伽に向かって発砲する。

御伽が舞った。

足元を狙った威嚇射撃とはいえ。焦りを見せることもなく、美しいバク宙を御伽は披露した。

着地と同時に振り返った御伽の視界にはロツクとボリスの姿はなかった。

Black Choir Sing a Hymn  
for THE DARKNESS

ロックとボリスが落ちた先には一台の車が停まっていた。

ボディは大きくへこんでいたが、ショッキングピンクの目立つその車は紛れもなくベニーの愛車『プリムス・ロードランナー』であった。「ロック……合流するとは聞いていたけど突然降ってくるのは……」

ベニーは突然の衝撃に頭を支えながらジョークをかまそうとした。しかし、その言葉をロックが遮る。

「ベニー、ジョークは後で聞くから、早く車を出してくれ！」

ロックがボリスを後部座席にのせながら声をあげる。

ただならぬ様子。

「わかった」

ベニーが車を急発進する。

「おいロック、かわいいジャックには会えたか？」

レヴィが先程の衝撃で噛み切ってしまった煙草のフィルターを吐き出しながら不機嫌そうに語りかける。

ロックがホテルモスクワに同行するようになってから数日、もしものためにとベニーに車を出してもらっていたが、レヴィが同行するのは初めてのことである。

「ああ、一目惚れしそうだったよ。あんなに綺麗な笑顔を見せられたらな」

普段いないはずのレヴィに驚く様子もなく、ロックは答える。

いい笑顔であった。

無垢、天真爛漫……あの笑顔を形容するには様々な言葉があるだろう。

しかし、適切な言葉が見つからなかった。

思い出す。

赤黒く染められた、肉、スポンジ、液体……

ロックが口元に手を当て、えずく。

死体ならこの町で数えきれないほど見てきた。  
血飛沫も何度も見てきた。

しかし……

「ベニーー・車停めろ!!」

レヴィの声が遠く聞こえる気がする。

急停車、一瞬浮くような感覚が心地よい。

ボリスが背中を叩く心配する声の子守唄のよう。

ドアが開く、引きずり降ろされる。

「ロックー」

ロックの目が焦点を取り戻すのがわかる。

「やあ、レヴィ。今日はベニーと一緒になのか」

右手が離される

右肘が曲がる

肩が上がる

ポニーテールが揺れる

肩が下がる

右肘が伸びる

右手が頬に当たる

低い、木を殴ったかのような音が暗く、細い路地に響く。

「痛いじゃないか!?!何をするんだ、レヴィ!?!」

崩れ落ちる。

ロックの上擦った声が響く。

「何をしているかだつて?それはこっちの台詞だ!テメエはジャックを見たのか。イエスカノーかも答えれねえのか!?!」

レヴィが声をあらげる。

イラついている。

右手を再び挙げる。

「二挺拳銃、落ち着け」

ボリスがレヴィの右手を掴み、引き上げる。

「OK, dad. 私はクールだ。何をすべきか理解している」

「ならば、右手の力を抜いたらどうだ？」

ボリスによって天高く掲げられたレヴィの右手は硬く結ばれ、今にも降り下ろさんと震えていた。

レヴィが舌打ちをし、硬く結ばれた拳がほどかれる。

ボリスはレヴィの手を放した。

自由になったレヴィは静かにロックに歩み寄る。

「ジャックは誰だ!? タイラーか？」

ロックの胸ぐらを掴み上げ、レヴィが問い掛ける。

ロックが吊り上げられる。

二人に、特にレヴィにボリスが反応する。あからさまに怒りを見せるレヴィの目は真つ直ぐにロックへと向けられている。

ボリスが一步踏み出そうとするが、ベニーがそれを制止する。

「軍曹さん、残念ながら、あの二人は僕とは違った意味で人付き合いが苦手なんでね。見守ってくれませんかい？」

人を信じることをやめた岡島録郎。

人を信じる生き方を知らないレベツカ・リー。

二人はロアナプラで一番不器用な生き方をしている。届かぬ信頼、届かぬ信用。

二人は生きるのが下手だ。

ロックの口が僅に動く。音はするが声は聞こえない。

「確としゃべりやがれーイン・ポ野郎がー」

レヴィの声が木霊する。人の歩かぬ安息日前の夜、ただでさえ響くレヴィの声は一層と響き渡った。

「Ripper IIは照由御伽だー」

ロックがおらぶ。

その声はレヴィの耳に届く。

「で、お前さんはジャックをどうするつもりだ？」

ロックは優しい。

しかし、その優しさが、周りを、ロック自身を、そして優しくされた当人を苦しめてきた。

ロックは答えるはずだ。仲間である自分達が殺すべきだと、仲間である自分達が罰を与えるべきだと。

そして、レヴィは以前、ベニーに言われた通り、自分が甘く、丸くなっていることに気付き、唇を噛んだ。

「本当に甘ちゃんだな。テメエも……」

そう小さく呟き、ロックを放した。

突然離れた支えに、ロックは驚く。

「レヴィ、どうするつもりだ？」

「悪いことをすれば保護者が叱る……ガキでも知ってることだ。そして、いま、ここであるアホ女の保護者はテメエだ、ロック」

甘い

緩い

だらしない

レヴィの頭を単語が駆け抜ける。

許せない……今の自分が

「彼女は……」

ロックの口が開く。

優しいロック

ホワイトカラーのロック

この世界の流儀を知らないロック

そして、そのロックと今のレヴィは変わらない。

「彼女には、罰を与えるべきだ。この町を弄んだ罪人として相応しい、残酷で残虐で生まれ変わることを拒否するような」

ロックが息を吸う。

「そして、この町を仕切るものについて、教えなければならぬ」

ロックが言い切る。この町で、この世界で最も軟弱で優しかったロックがこの町の秩序を守ると、そう言った。

レヴィはなにも言わず、静かに車へと向かう。

「ベニー、行くぞ」

ベニーも歩み出す。

「ボリスさん、ちよつとばかり、二人のお人好しに付き合ってもらって

もいいかな？」

「残念ながら、我々は大尉殿に逆らえない。譲歩しても一週間だ」

ボリスも車へと向かう。その顔は普段の鉄仮面からは想像できぬほど軟らかかった。

「目的地はどこだい？」

ベニーがボディに触れながらこれから起こることの観測者として面白い方向に転がることを願いながらロックとレヴィに語りかける。  
「警察署だ」

ロックとレヴィの声が重なり、夜のロアナプラを駆けた。

そして、その声は最も聞かれたくないものの耳に入ってしまった。

shallow cleverness

シヨツキングピンクの『プリムス・ロードランナー』はロアナプラの大通を駆け抜けていた。

「どころで」

ベニーが振り向き、ロツクの方を向く。危険ではあるが、今は土曜日の深夜、誰しもが『切り裂きジャック』を怖れ、外出しないため道路はクリスマスのごとく、一台の車も走っていないかった。

ロツクが顔をあげ、ベニーの方を向く。

「どうして警察署なんかに向かうんだい？あそこにいるのは肥えた豚と犬だけだと思っただけど？」

ベニーは不思議に思っていた。

ここロアナプラでは警察は役に立たない。銅色の紙袋をちらつかせるだけでこの町で起きた犯罪の幾つかが迷宮入りしている。

退職金と、ドーナツと、ゴルフ、そしてマフィアから集めた紙袋のコレクションにしか興味を示さない彼らが役に立つとは思えなかった。

「ベニー、あんたは勘違いしている。いくら無能でも肩書は警察だ。何かしらの情報は必ずある。今はタイラーを追うための情報が僅かでも欲しい」

無能には無能なりの使い方がある。

戦場では笛吹にも弾除や、鉄砲弾など何かしらの活用法方がある。

「ロツク、自分はもうどうしたらいい？」

ボリスがその大きな体を縮ませながら尋ねる。

警察にとってボリスは招きたくない客である。バラライカの右腕という肩書きが、彼を多くの人々から警戒させていた。

「ボリスさんは……」

ロツクが口を開こうとするが、それを助手席に座るレヴィが遮る。

「あんたはホテルモスクワの近くで降ろす。で、姉御に狐の尻尾が掴めなかったことを報告すればいい」

「そうだ。いくらバラライカさんが最も信頼を置くボリスさんであつ

たとしてもいつも通りの時刻に報告もなければ違和感を覚える。だから、いつもホテルモスクワと合流する時間に自然に混ざり込み、いつも通りの報告をしてください」

ボリスは納得したようで、ただ頭を縦に振った。

「俺についてはベニーと一緒に来たレヴィに無理矢理飲みに拐われたとでも報告してください」

ロックが軽く笑みを浮かべながら言う。

これならばバラライカも納得するであろう。

そして、一行をのせた車はホテルモスクワの集合場所であるメインストリートの一角の空き家の近くへと向かった。

「ここらでよろしいですか？軍曹殿」

ゆっくりと車が停まる。ホテルモスクワの集合場所から歩いていくことができる場所、人目に着かない暗い路地裏。

「ああ、問題ない。助かった」

相も変わらず、無愛想で無口、無表情な男である。

そう思いながらロックは息抜きがてらタバコに火を点けようとした。

「さあ、情報集めに行こうか」

そう言おうとした。

しかし、その口は開くことがなかった。

「ハイ、碌郎。……あら、今日はレベツカも一緒なの？」

今一番、会いたくなかった。

ロックは心の中で今日の前にいるブロンドの髪をし、顔面に大きな傷を持ち、鋭く輝く青い瞳の女がロックの考える最悪の相手ではないことを祈った。

「どうしたのかしら？そんなに驚いて……。もしかしてネズミを逃がす算段でもしていたのかしら？」

ロックは最悪の相手が最悪のタイミングで最悪な感情を持ち合わせていることへの怒りを天にぶつけた。



「どうして、こうなっちゃったんだ」

予定にはなかった。

ここにバラライカがいるはずはなかった。

「何してるの？ 緑郎」

白煙を吐きながら非常階段の手すりに肘をつき、妖めかしい表情で微笑みかける。

不覚にも美しさを感じてしまう。

風でブロンドの髪揺れ、光をも反射する。

美しい。

「偶然ベニーとレヴィにそこであつたので飲みに行こうかと考えていたところですよ。ボリスさんとはここで別れて」

この程度の嘘は通じるわけがない。

彼女は鬼だ。全てを見ている。

「あら、日本には知り合いに会うと屋上から落ちる風習があるのね。自殺が多いのも頷けるわ」

この女にはなにも通じない。通じるとするならばただひとつである。

「わかりました」

両手を挙げる。なにも通じないのであれば、彼らに通じる手段をとるだけだ。

「キツネはどこにいるの？ それさえ言えばとりあえず心臓と眉間を撃つのはやめてあげるわ」

レヴィが両腋のソードカトラスに手をかける。

必要とあらば抜くことを覚悟した目だ。

「日本には昔から義理と人情という言葉があります」

ここまで来たのなら嘘八百だろうが口からでまかせだろうが関係はない。照由御伽をこの手で罰する、それだけのために動く。

そうなるように口を動かす。

そうなるように仕向ける。

そうするしか方法はない。

「我々には貴女に雇われ、彼女を追いかけるといふ責務があります。そして我々はその任を果す義理があります。そして照由御伽は我々の仲間であり、それは即ち家族と同義。そして、家族として照由御伽を罰する人情が我々にはあります。身内からでた埃は家族である我々が掃除するのが道義つてもものでしょう」

岡嶋禄郎は固く、堅く、硬く目を瞑った。これから足を撃ち抜かれるのかもしれない。もしくは手か。

バラライカは笑った。

夜の細道に響き渡るかのような声で。

「やはりお前は面白いヤツだ。では聞くぞロック、ジャックを捕らえられるか?」

「必ず。この町のあり方を彼女の海馬に刻みます」

バラライカはロックを一瞥する。

人は変わるものだ。いい意味でも、悪い意味でも。国のために戦いながらも、どれだけの戦果を残そうとも、アジアの片隅でマフィアごっこをする他なかったホテルモスクワ。社会の歯車として生かされ続けながらも、アジアの片隅でマフィアの一員として生き続けるロック。

真の幸福者はどちらか、考えながらバラライカは静かに階段を降りる。途中煙草をくわえ、火を点ける。

紫煙が登る。

「ロック。面白いものを見せてくれ」

それだけを伝えると、バラライカはボリスの方を向いた。

「軍曹、撤退だ。この件はラグーンファミリーに委ねることとする。無線で回せ」

振り返り、歩き始めるバラライカを確認しボリスが微笑みかける。

「頼むぞ」

短い。だが、様々な意味にとることができる。

町を

御伽を

バラライカの機嫌を

一度に背負うものの増えてしまったロックはその場にへたりこんでしまった。

Texas Cowboy drive a horse of iron

ショッキングピンクのスポーツカーは静まり返った悪漢の町を騒音を上げながら警察署へと向かっていった。

ボリスを降ろし、残されたロック、レヴィ、ベニーの三人はこれからについて騒々しく相談していた。

「ロック、さすがにそろそろヤバい気がするんだが？」

とベニーが尋ねれば、

「来ちまったのはしようがねえだろ、腹括りやがれ」

とレヴィが噛みつく。

同じようなやり取りを何回と繰り返している。ロックはタバコをくわえながら自分の膝を見つめていた。

「何辛気臭いことしてんだ。あたしらがちびっ子ジャーナリスト取っ捕まえて、こめかみにカトラスを当ててお話しすれば全部終わるんだよ」

助手席に座るレヴィは声を荒げ、ダッシュボードに足を載せた。

ロックは注意しようと助手席のシートに左手を掛けたが

「レヴィ、今からロアナプラ周辺では比較的まともな連中の巢に行くんだから、マナーは心掛けるべきだと僕とロックは思ってるよ」

ベニーの忠告を素直にレヴィが聞き足を下ろすのを見てシートにかけた手を離れた。

「レヴィ」

ロックが呟く。

両手で両膝を握り、前腕に筋を立てて、小さくも力強い声で呟いた。「ここからは今まで以上にオフザケはなしだ。彼女はどこにいるのか、何を狙っているのか一切わからない。常にスコープが俺たちの眉間を見ていると思うてくれ」

その一言で車内の空気が変わった。

レヴィはカトラスを取りだしグリップの具合を確かめ、見てわかる範囲で調子を見始めた。

ベニーはハンドルを強く握りしめ、皮膚とハンドルの皮が音を立てた。

静かに時が流れ、一行は警察署に辿り着いていた。

車を降り、署内へと入っていく。警察の厄介になることが多いレベッカ・リーが自ら警察署に来るとあつては署内はちよつとした騒動になっていた。

窓口へと向かいレヴィが啖呵を切る。

「御宅のボスはどこだ？」

足をデスクに乗せ、受付嬢に顔を寄せる。

詰め寄るレヴィを突然の力が後へと引つ張る。

「レヴィ、ここはギャングでもなければラグーン商会のオフィスでもないんだ。クールになれ」

ロックはラグーン号に初めて乗せられたその日のことを懐かしみながらレヴィを羽交い締めにした。

「OK、今日のボスはテメエだ。私はクールだ。少なくともチックの店の麻婆豆腐よりかはクールだ」

「それはクールと言わない。あそこの麻婆豆腐で俺は三度は口の中を火傷している」

落ち着いて辺りを見回すと警官が数名、三人を取り囲んでいた。  
「こんなことになるんなら事務所静かにビールを飲んでいれば良かった」

ベニーが両手を挙げながら天へと呟いた。

廻の様子に気がついたロックはレヴィをゆっくりと離し、ベニーに従って両手を挙げた。

「えつと……」

言葉に詰まる。

喉から声がでない。

「ワトサップ署長に用件があつて伺つたのですが。ワトサップ氏はこちらにおりますか？」

四方を警官に囲まれているなか、背後から見知った声が聞こえた。「ん？バラライカの運び屋のところのガキじゃねえか。何してんだ？」

ロツクはすぐさま振り向きエントランスの方を向く。

濃い褐色の肌丸渾のサングラス。ここまで聞けばダツチのようであるが、ダツチよりはタツパはなく腹も出ている。ワトサツプ署長であった。